



TITLE:

# <研究ノート> ネパールのキリスト教伝道史(1600s-1960)

AUTHOR(S):

山本, 忠義

---

CITATION:

山本, 忠義. <研究ノート> ネパールのキリスト教伝道史(1600s-1960). アジア・キリスト教・多元性 2004, 2: 149-166

ISSUE DATE:

2004-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57677>

RIGHT:

## ネパールのキリスト教伝道史 (1600s～1960s)

山本忠義

### [ はじめに ]

これは、米国イリノイ州ホイートン大学大学院に修士論文として提出された、シンディ・ペリの論文『伝記によるネパール教会史』(*A Biographical History of the Church in Nepal*, by Cindy Perry, 1989)を翻訳、要約したものであるが、理解を深めるために最初の部分([ ])を追加、題目を上記の通り改めた。このシンディ・ペリの論文は、ネパールの地理や歴史や文化がこの国のキリスト教受容にいかに困難な足枷となってきたかを示す貴重な資料を提供しているものといえる。

ごく最近までネパールにおけるキリスト教伝道がきわめて困難であった理由の1つに、ネパールの過酷な地理的条件が挙げられるであろう。しかし最大の理由はネパールの歴史にカースト制度と排外政策を導入、施行してきたことであるといえる。したがって、まず、カースト制度の導入と排外政策の施行について歴史的に瞥見しておきたいと思う。

### [ ] カースト制度導入と排外政策施行の歴史的背景<sup>(1)</sup>

ネパールの歴史はカトマンズ盆地における支配王朝の変遷史であるといつてよい。現存する石碑や貨幣によれば、4世紀半ばから8世紀半ばまではリッチャヴィ王朝(Lichhavi Dynasty)が栄え、宮廷ではサンスクリット語が使われ、王たちはヒンドゥー教徒(Hindu)であると同時に仏教徒(Buddhist)でもあった。8世紀半ばから13世紀半ばのことは変転と混乱の時代が続いたようで詳しくは解明されていない。

ネパールの中世にあたるマッラー王朝(Malla Dynasty)は、カトマンズの原住民であるネワール人を基盤にして、13世紀半ばから18世紀後半まで続いた。初期の王たちはヒンズー教徒であったが、宮廷に行き渡る仏教にも寛大であった。ところが、14世紀後半、ジャヤステイッティ=マッラ王(King Jayasthiti Malla)がインドの僧侶たちの助言に従ってカースト制度(caste)を導入し、以来今日まで600年の間、社会制度や人心の奥深くに入り込み、社会の深い傷になってきた。カースト制度は浄・不浄の思想が絡む世襲的な階級身分制度で、職業の選

折をも阻む制度であった。このとき、ネワール人たちは 64 の職業カーストに構成し直された。カースト制度は、バフン (Bahun / Brahman, 僧侶階級)・チェットリ (Chhetri, 武士階級) を頂点に社会と国民を 2,000 ~ 3,000 にも細分化するもので、後にジャン＝バハドゥル＝ラナ (Jung Bahadur Rana) によって発布された《ネパール国内法典》(National Code of Nepal, 1854) はカースト制度を一段と補強し普遍化した。ネパールがキリスト教の伝道と浸透を拒んできた最大の理由の 1 つが、このカースト制度の崩壊を恐れたバフン・チェットリの抵抗であった。もう 1 つの最大の理由は、18 世紀後半から現代まで続くシャー王朝 (Shah Dynasty) のヒンズー (教化 (Hinduization) とネパール (語) 化 (Nepalization) を伴う徹底した排外政策 (exclusion policy) であったといえる。

中世を彩るマッラ王朝の絢爛とした建築と芸術と文化は 15 世紀までに開花し、ネワール語が (サンスクリット語とともに) 宮廷においても使われる程であった。ところが、15 世紀末、ヤクシャ＝マッラ王 (King Yaksha Malla) の死後、盆地はカトマンズ (Kathmandu, 旧名: カンティプル) バクタプル (Bhaktapur, 旧名: バドガオン) ラリトプル (Lalitpur, 旧名: パタン) に分割され、弱体化を余儀なくされていった。しかしバクタプルのジャヤ＝ランジット＝マッラー王 (King Jaya Ranjit Malla) やカトマンズのジャヤ＝プラカッシュ＝マッラー王 (King Jaya Prakash Malla) は《良心の自由令》(Decree of Liberty of Conscience) を発布して宣教師たちの生活と宣教を手厚く保護したため、ネパールのキリスト教の将来は明るく見えた。

ところが、1769 年、ゴルカを本拠とするプリトゥヴィ＝ナラヤン＝シャー王 (King Prithvi Narayan Shah) がカトマンズ盆地を征服してシャー王朝 (Shah Dynasty) を興すとすぐ、排外政策 (exclusion policy) を採り、すでに定住していた宣教師や改宗者たちを国外に追放した。以後、ダーズリンを中心に、ネパールと国境を接するインドがネパール人キリスト者の亡命地となった。また英国東インド会社との国境紛争後に結ばれた英ネ和親条約 (Treaty of Sugauli, 1816) は、英国人を除く外国人の入国を禁じ、排外政策を補強することになった。このようにシャー王朝の排外政策は、1846 年にジャン＝バハドゥル＝ラナ将軍 (General Jung Bahadur Rana) がクーデターによって権力を握ったラナ家専制政治 (Rana oligarchy, 1846 ~ 1951) においても変わらず、トリブヴァン＝ヴィル＝ヴィクラム＝シャー王 (King Tribhuvan Vir Vikram Shah) の王政復古 (1951) による排外政策の廃止 (開国) まで続くことになる。

しかし王政復古の後、直ちに民主的政府が樹立されたのではなかった。次のマヘンドラ王 (King Mahendra) は 1959 年、ネパール史上最初の総選挙を行ったが、ネパール＝ कांग्रेस 党 (Nepali Congress Party) が圧勝したため、これを弾圧、一切の政党政治を禁止した。また 1962 年、新憲法を発布して親政政治 (Panchayat) を断行した。この新憲法はネパールを 1 党・1 宗教の国家と規定し、政党政治活動や言論や集会の自由を禁止するものであった。「信教の自由」は憲法上だけのことで改宗を禁じる特別法があった。現にこの憲法のもとに投獄され、鞭打た

れたキリスト者たちも少なくなかった。続くヴィレンドラ王（King Virendra）もまた 1980 年、国民の信任投票の上で親政政治（Panchayat）を継続し、罰せられるキリスト者が後を断たなかった。開国によってインド在住のネパール人キリスト者たちが帰国し始めたが、本当の「信教の自由」は、1990 年の民主化運動の総決算となった民主憲法を待たなければならない。しかしこの憲法もネパールをヒンズー教国と明言している以上、真の「信教の自由」が保証された訳ではないであろう。

## 【 】 ネパールへのキリスト教の浸透<sup>(2)</sup>

1600 年代以前には、ネパールでキリストの名が聞かれたかどうかは疑わしい。しかし、1600 年代になって、イエズス会（Jesuit Order）がインドとチベットを結ぶ交通路としてネパールを利用し始めている。まず 1579 年、ムガル帝国皇帝アクバル（the Great Mogul Akbar）の招待を受けたイエズス会士たち（Jesuit）が北インドに滞在したことをきっかけに、チベット＝ミッション（Tibetan Mission）を組織し、ネパールをラサへ至る交通路として使い始めた。次に 1628 年、南チベット＝ミッション（South Tibetan Mission）のジョン＝キャブラル神父（Fr. Joan Cabral）が、チベットからインドへ帰る途中、カトマンズに立ち寄り、ネパール王の歓迎を受けた。更に 1661 年、イエズス会の 2 人の神父が北京からローマへ至るルートを求めてカトマンズへ入り、プラタパ＝マッラ王（King Pratapa Malla）から歓迎を受け、宣教師が再訪するなら「住居の提供と福音宣教の自由を保証する」と約束されたが、再訪は実現しなかった。1700 年代初期にもイエズス会士がネパールを通過したが、滞在はしなかった。この頃、ネパール人の改宗者がいたが、すべてチベットのラサに住む商人（殆どがネワール人）であった。

イエズス会のミッションは、やがてカプチン会（Capuchin Order）に引き継がれた。1703 年、チベット王国の福音宣教を目指し、チベット＝ネパール＝ミッション（Tibet-Nepal Mission）が創設されたが、ネパールはこれまで通りラサへの交通路でしかなかった。

1715 年、ネパール＝ミッション（Nepal Mission）がはじめて組織され、2 人のカプチン会修道士（Capuchin）がネパールに滞在し始めた。これも元々ラサでの宣教を支援するものであったが、次第にネパール＝ミッションへと発展したものである。

当時カトマンズ盆地はマッラ王朝の支配下にあり、3 つの王国に分裂していた。カプチン会修道士たちはカトマンズで自由診療を提供、カトマンズのジャガジュ＝ジャヤ＝マッラ王（King Jagaj Jaya Malla）が最初の患者となった。感謝した王は彼らに住宅を提供し、しばしば彼らを訪問した。これがバフンたち（Bahun）の嫉妬をかい、スパイや罪科の嫌疑をかけられて、修道士たちは 1722 年にはカトマンズを去らざるをえなかった。幸いにも、すでに友好関係を築いていたバクタブルのランジット＝マッラ王（King Ranjit Malla）が彼らを迎え入れ、ミ

ッションは 1731 年に人材不足のために消滅するまで続いた。当時、ネパール国内で臨終洗礼を受けた子供の記録は残っているが、大人の改宗者の記録はない。しかし、ラサでは多少のネパール人がキリスト者になっていた。

1732 年、フランシス＝ホリス神父（Fr. Francis Horace）がラサからネパールに入ったとき、彼はラサで改宗したネパール人（殆どがネワール人）を数名連れてきた。カトマンズに入るや否や、彼は 4、5 か月投獄されたが、これはバフンの扇動によるものであった。キリスト者たちは財産を没収され、暴行され、脅かされたりした。ホリス神父はチベットからきた神父とともに、カトマンズとバクタプルで約 1 年働き、何人かの成人を改宗させ、また何人かの子供に臨終洗礼を施した。1734 年、2 人の神父は苦しい選択を迫られ、ネパールを去らざるを得なかった。しかし、カトマンズ盆地の王侯たちは宣教師たちに親書と使節をおくり、ネパールへ戻ってくるように請願した。

間もなく 2 人の宣教師がネパールに戻ると、バクタプルのジャヤ＝ランジット＝マッラ王（King Jaya Ranjit Malla）は《良心の自由令》（Decree of Liberty of Conscience, 1737）を發布し、大きな住居を与えた。これは、宣教師たちが何らの妨害もなく自由にみずからの宗教を宣教できるとする画期的な法令であった。カトマンズのジャヤ＝プラカッシュ＝マッラ王（King Jaya Prakash Malla）も同じく《良心の自由令》（1737）を發布した。宣教師たちの宗教書を調べたが、それらは良いもので、何も彼らを妨害してはならない、というものであった。以上のような王侯たちの譲歩は前例のないもので、住居を提供し、宣教の自由を認め、国民たちの信教の自由を保証するものであった。こうしてカプチン会修道士たちはカトマンズ盆地へと復帰し、続く数年の内に、カトマンズでは 10 人の成人が教会にもたらされ、バクタプルでは 30 人が臨終洗礼を受け、数名の成人が教会で教えを受けた。こうして小さなキリスト教共同社会がゆっくりと育っていった。

1744 年には、カプチン会宣教師たちはラリトプルへも招聘を受け、プラカッシュ＝マッラ＝デヴ王（King Prakash Malla Dev）から快適な住居が与えられたほか、《良心の自由令》が口頭で發布された。

こうして、ネパールにおけるキリスト教の前途は明るく見えた。礼拝部屋が設けられ、医薬品が人々に近づく手段に用いられ、何千という重病の幼児や子供が洗礼を受けた。神父たちは地域のネワール語（Newari Language）に熟達し、護教論（apologetics）や教義問答書（catechism）が編纂された。教会もカトマンズとバクタプルに建てられたが、現存していない。キリストに繋がった人々は約 80 人にも及んだ。信仰者の多くはネワール人の土地なし農民で、神父たちは彼らに土地を買い与えた。一般の人々はバフンや貴族の言葉よりも福音の言葉に反応した。しかし村八分（outcast）や失業を恐れて改宗は稀であった。改宗者たちはカーストを侵害するものとして非難、迫害されたのである。歴史はこの後、約 180 年もの間、ネパールの福音宣教

の促進に門戸を開ざすことになる。

1769 年、西方のゴルカ王国 ( Gorkha Kingdom ) のプリトゥヴィ = ナラヤン = シャー王 ( King Prithvi Narayan Shah ) が、カトマンズ盆地の諸国を攻撃、マッラ王朝を征服した。この時キリスト者と考えられたカトマンズのジャヤ = プラカッシュ = マッラ王 ( King Jaya Prakash Malla ) がベンガルに駐留する英軍に支援を求めたため、この時点からヨーロッパの神父たちは英国と共謀するスパイの嫌疑をかけられるようになった。宣教師や改宗者は逮捕されて足枷をはめられたり、牢に繋がれてひどく打たれた者もいた。宣教師たちと改宗者たちは、先を恐れて生きなければならなくなった。改宗農民たちはマッラ王朝から与えられた土地を取り上げられ、生計が立たなくなってしまった。キリスト者たちは苦しい選択を迫られ、亡命を余儀なくされたのである。

1769 年、ヨセフ神父 ( Fr. Joseph ) が率いる 14 家族と 5 人の求道者を含む合計 57 人のネパール人キリスト者がカトマンズを脱出し、ネパール国境から徒歩 2 日の所にある北インドのベティア ( Bettiah ) をキリスト者植民地として定住した。他の神父たちは一時的に英軍の攻撃に備えての人質にされた。

1769 年の脱出 ( exodus ) 以後も宣教師の招聘要請がなかったわけではないが、実現の諸条件が整うはずがなかった。それ以上にヨーロッパ人の入国を拒んだのは、英国東インド会社との間で締結した英ネ和親条約 ( Treaty of Sugauli, 1816 ) であった。これは英国人以外の外国人の入国を禁ずるもので、排外政策を補強するものであった。

## 【 】 ネパールの排外政策 ( 鎖国 ) <sup>(3)</sup>

1769 年、プリトゥヴィ = ナラヤン = シャー王 ( King Prithvi Narayan Shah ) は、カトマンズ盆地の諸王国を征服、統一した。彼の言語であるネパール語は多様な民族語と結びつき、異民族間の混成共通語、リンガ = フランカ ( lingua franca ) となった。しかし、カトマンズ盆地のネパール語はそのまま残った。国家は建国者たちのヒンズー教的性格を反映して、近代世界で唯一のヒンズー教国となった。プリトゥヴィ = ナラヤン = シャー王はインドにおける英国の侵略的植民地政策を目の当たりに見て、自国の主権を排外政策 ( exclusion policy, 1769-1951 ) によって断固として守ろうとした。それは福音の浸透を断固として拒み続けることでもあった。1769 年のキリスト者たちの国外追放は排外政策の序曲であった。

外国人とキリスト者に対する排外政策には 2 つの理由がある。1 つは独立を守ろうとする政治的理由で、もう 1 つは社会の心臓部ともいえる宗教的基盤に関わる理由である。このヒンズー教国はすべてのものが神々の王国に属し、「穢されてはならない」 ( undefiled ) ものであり、「損なわれてはならない」 ( intact ) ものである。キリスト教はそれを脅かすものと考えられた

のである。神々に支配された社会においては、宗教的逸脱や変化を認める余地はなく、穢れや逸脱から国家を守る最良の政策が排外政策であった。ネパールの政策は政教一致の構造をしていたのである。

国境紛争に端を発した英ネ戦争 (Anglo-Nepalese War, 1814-1815) はこの政策を補強することになった。英軍に対するネパールの抵抗はネパールの独立を守り、インドの尊敬を得る結果となった。しかし、英ネ和親条約 (Treaty of Sugauli, 1816) によってネパールは領土の 3 分の 1 を失い、現在の領土が確定することになった。その上、カトマンズにインド総督代理の居住をも許すことになった。この名誉ある敗北 (honorable defeat) 以後、ネパールの支配者たちはあらゆる外国人とキリスト者に不信感を抱き、1951 年まで国を閉ざすことになった。

1846 年、ジャン＝パハドゥル＝ラナ将軍 (General Jung Bahadur Rana) がクーデタによって権力を掌握し、みずから首相兼将軍と宣言、104 年にわたるラナ家専制政治 (1846-1951) が始まった。英国は英ネ和親条約の改定において彼を大王 (Maharajah) と認める取り引きをし、シャー国王を肩書きだけの身分 (傀儡) に落とした。英国はネパールの外交を支配し、インド総督府の許可なしには外国人がネパールへ入ることを禁止し、排外政策を補強した。ラナ家専制政治は、1951 年のトリブヴァン王 (King Tribhuvan) の王政復古宣言と開国まで続くことになる。

1951 年以前のキリスト者に対する詳しい排外政策の情報は鮮明ではないが、1800 年代後半の法律は、聖書及びその関連文書の売買及び使用を禁じ、またいかなる国のキリスト者であれネパールへの入国と居住を厳しく禁じた。たとえば、1908 年、聖書行商人 (colporteur) が 700 ~ 800 冊ものネパール語とヒンディー語の聖書や聖書関連書を背負ってネパールへ入り、カトマンズで売ったが、政府に喚問され、インドへ帰還している。

## 【 】 インドにおける亡命教会とネパール語の翻訳聖書

### 《インドにおける亡命教会》<sup>(4)</sup>

1769 年の脱出 (exodus) 後、ネパール人キリスト者たちはダージリン (Darjeeling) を中心に、インドのネパール国境地帯に移住し、教会の移植と聖書のネパール語翻訳に尽力した。インドには比較的、信教の自由があったからである。

1835 年、ダージリンが英国に割譲された時、その住民の多くは原住民のレプチャ人 (Lepchas) で、人口は希薄であった。しかし、英国が紅茶産業を通して地域の発展を図ったため、多くのネパール人が採用され、ネパール人の人口が優勢となり、増加した。

ダージリンが英国に開かれたことにより、まずドイツ＝モラヴィア宣教師団 (German Moravian Missionaries) が、次いで英国国教会宣教師団 (Anglican Chaplains) が入ってきた。英国国教会の

スタート師 (Rev. Start) は 1852 年、カルカッタで聖書の一部をネパール語に翻訳して印刷、ニーベル師 (Rev. Niebel) が 1865 年までこれを引き継いだ。ページ師 (Rev. J.C. Page) は 1871~1876 年の間、ダーズリンで書店を経営、ネパール人の福音宣教に尽力した。

しかし、ダーズリンにおけるネパール人教会の本当の始まりは、スコットランド教会 (Church of Scotland) のウィリアム・マクファーレン師 (Rev. William Macfarlane) の先駆的な努力に負っている。彼は 1868 年、ミッションの開拓調査のためにダーズリンに赴いた。ダーズリンはすでに郡政府のある重要な地域になり、人口はネパール人が大多数を占め、ネパール語が混成共通語 (lingua franca) となっていた。彼は 1870 年、東部ヒマラヤ・ミッション (Eastern Himalayan Mission) を発足させ、語学研修と御言葉 (the Word) の説教を優先させ、文献研究や学校建設などを実施した。彼は毎日バザールや村々で説教し、聖書の抜粋を配布した。ネパール人は友好的、開放的で聖書を熱心に受け入れた。しかし、ネパール人キリスト者たちが妨害を全く受けなくて過ごせた訳ではない。ここでもカースト (caste) が最も恐ろしい障害物であった。たとえば、後にカリンボン (Kalimpong) で最初のネパール人説教師となったスクマン・リンブ (Sukman Limbu) がネパール人の家に入れて貰えず、戸外で食べ、ジャングルで寝るといった経験をしたり、ネパール人サドゥたち (Sadhu) が聖書行商人 (colporteur) を打ちのめし、書物を全部燃やしてしまうような事件も起こっている。

こうした迫害の中にあっても、ダーズリンのネパール人教会は次第に成長し、1880 年にはネパール人とレプチャ人を合わせて 130 人のキリスト者が生まれ、1900 年までには 2,500 人を超え、1945 年にはほぼ 14,000 人にも達している。この急速な成長の要因は、インドにおける信教の自由と英国によるその権利の保護、ダーズリン地域におけるバフンたちの強靱さの欠如、移住したネパール人たちの生活の激変と開放、あるいはみずからの言語による福音説教、などが考えられる。

ダーズリンのネパール人教会の成長とともに、やがて福音がネパールへと逆に溢れ出す現象が起こり始めた。1951 年にネパールが開国し福音に門戸を開く前の 75 年の間、ネパール人教会は何千もの人々に福音のメッセージを伝えた。バザールや国境では、福音宣教の説教が為され、聖書の抜刷やキリスト教文書が配られ、そのためにネパールへ侵入することさえもあった。なかでも、ネパール人が商品やポテトを持って頻繁にやって来るバザールでは前哨基地が設けられ、説教が為され、何千という福音書が売られてネパールへ入って行った。

教会の成長には女性も重要な役割を演じた。1915 年、アリス・ブラダン (Alice Pradhan) は郡の婦人宣教師に指名され、婦人たちに福音を活動的に宣教した。ルース・ムキア (Ruth Mukia) は国境近くのミリク・バイブル・スクール (Mirik Bible School) の聖書学教師となり、ネパールへの幻を持ちながら青年たちの指導に当たった。

こうしてダーズリンに亡命して成長したネパール人教会が、ネパールの教会の先駆となった



のである。

《ネパール語聖書》<sup>(5)</sup>

ネパール語による最初の印刷物は、1820年にインドで発行された、エイトン(J.A. Ayton)の『ネパール語文法』(A Nepali Grammar)である。当時はネパール語の文献は殆どなかった。ネパール語はサンスクリット語(Sanskrit)から派生した若い言語で、多くの民族語とともにネパールの限られた地域でしか話されていなかった。サンスクリットは王国の詩人や作家によって適切な媒体と考えられ、「文書言語」(document language)として政府関連文書にも使われていた。それにもかかわらず、ネパール語は建国の父、プリトゥヴィ＝ナラヤン＝シャー王(King Prithvi Narayan Shah)の宮廷言語であったため、ネパール国家の混成共通語(lingua franca)となり、彼もこれを推進した。と言っても、1950年までの鎖国政策や教育制度のない体制下での識字率は10%以下であった。

1812年、インドのセランポアー大学(Serampore college)のウィリアム＝ケリ(William Carey)とその同僚たちが、インドの学者(pandit)を使ってサンスクリット語から翻訳を始め、1821年に「ネパール語新約聖書」(Nepala New Testament)を完成、1827年には西部ネパールの言語で「パルバ語新約聖書」(Palpa New Testament)を完成している。これらの聖書は、文章構成や文法や単語が他の言語と混合したり影響を受けたりしているため、使用可能かどうかには異議がある。しかし、キリスト者たちによって始められたことに意義があるといえる。

ケリと同じ時代、ネパール人たちのダーズリンへの大量移民は、ネパール語文献の発展に広範囲な影響を与えた。まず宣教師たちが、次いでネパール人改宗者たち、なかでもガンガ＝ブラサッド＝ブラダン(Ganga Prasad Pradhan)が、聖書翻訳に尽力した。

1852年までに、英国国教会のスタート師(Rev. Start)が「ルカ」(Luke)と「使徒行伝」(Acts of the Apostles)を翻訳し、カルカッタで印刷した。1861年には、ニーベル師(Rev. Niebel)がこれらの改訂版を発行した。

スコットランド教会の東部ヒマラヤ＝ミッション(Eastern Himalayan Mission)の到来は、ネパール語のキリスト教文書の翻訳と出版の真の転換点となった。マックファーレン師(Rev. Macfarlane)はスタート師とニーベル師の「ルカ」と「使徒行伝」の大型版を発行したが、同時に聖書のネパール語翻訳の仕事にも取り掛かり、1875年までにガンガ＝ブラサッドを含む2人の改宗者を助手につけ、聖書の部分訳を実施した。

1876年、マックファーレンはスコットランド＝ミッション＝孤児出版(Scottish Mission Orphanage Press)を開業し、広範囲な活動に従事したが、この会社は1901年にガンガ＝ブラサッド＝ブラダンに引き継がれ、「ゴルカ出版」(Gorkha Press)と名を改めた。ダーズリンのバザールに書物配送センターが開かれ、聖書やキリスト教文書や学校教科書などの販売と配布が

行なわれた。聖書行商人 (colporteur) も雇われ、何千ものキリスト教文書が国境を行き来する商人たちの手を通してネパールへ入って行った。

1893 年、英国聖書協会 (BFBS : British Foreign Bible Society) がネパール語聖書の仕事に取り掛かった。1894 年、聖書協会はガンガ＝ブラサッド＝ブラダンをネパール語の翻訳者として指名し、数年の間、スコットランド教会のターンブル師 (A. Turnbull) とキルガー師 (R. Kilgour) が助手を務めた。1902 年にはネパール語版の新約聖書が完成し、旧約聖書の仕事が始まった。

1914 年、ネパール語版の新旧約聖書が出版され、旧約聖書の初版は 4,500 部が印刷された。その改訂版が 1977 年に出されるまでは、再度、印刷されることはなかった。1950 年代になってネパールが開国され、キリスト者たちがネパールに居住し始めた時にも、1 世代で 10 組の新旧約聖書しか購入されなかった。ネパール人たちは英国聖書協会 (BFBS) が 1930 年に出版した新改訂版の新約聖書を持っていたからである。

ダージリンのネパール人キリスト者たちは祖国ネパールへ福音を持ちこむ情熱をもっていたが、ネパールの法律は聖書とキリスト教文書の販売や使用を厳しく禁じていた。それ故、ネパールへ持ち込まれた量はよく分かっていない。

## [ ] 祖国の開国と帰還

### 《南部と西部の福音宣教》<sup>(6)</sup>

1933 年、北インドの国境地帯で働く数人の宣教師たちがラクシヨル (Raxaul) に集まり祈禱会を開いた。これは 1940 年代の国境集会 (NBF : Nepal Border Fellowship) の先駆となった。彼らは国籍も宗派も違ってしたが、ネパールの福音宣教という共通の関心の元に集まり、祈りの輪 (prayer circular) を実施し、年 1 回の会議を開催した。ネパール国境集会 (NBF) は国境で働く宣教師たちの指針となり、ある時には 75 名以上ものメンバーがいた。

1900 年代前半はプロテスタント宣教師の活動が増した時代であった。ネパール東部国境のダージリン地域での働きに加えて、1850 年代の初期頃からネパール西部と南部の国境地帯全体に沿って宣教師たちが散らばっていた。

西部国境では、ダージリンほど多くはないが、何百人ものネパール人がマハカリ川 (Mahakali River) を渡り、ピトラガル (Pitoragarh) やタナクプル (Tanakpur) に入った。彼らの殆どは季節移住者で労働や商売や医療を求めての往来であった。彼らの間での宣教師たちの活動は、ネパール人の教会を建設したという点で成果はあったが、貧弱なものであった。

南部国境では事情は違っていた。ラクシヨル (Raxaul) はカトマンズに至る道路があり最も重要な地点であった。宣教師たちは 1900 年代初期から南部国境に沿った 4 地点に駐在し、その宣教活動はネパールに教会を建てることに影響を与えた。ネパール人の福音伝道師たち

(evangelist) は 1930 年代初期からダーズリンから採用され、ラクショル (Raxaul) とルパイディア (Rupaidhia) に住んだ。若いネパール人改宗者たちが福音伝道師たちと活動を始め、養育され訓練されて、国境の他の地点、特にナウタンワ (Nautanwa) やジョグバニ (Jogbani) へと広がっていった。これらの者たちは後にネパール国内で牧師、伝道師となっていく。

この頃、ラナ家専制 (1846-1951) はなおも続き、ネパールは世界から孤立し、国民のための基本的な施設さえもなかった。人々は、職を求め、英国グルカ兵 (Gurkha soldier) に志願し、教育の機会を求め、なかでも病気治療を求めて、徐々にインドへ浸透して行った。国境を越えると、世界が急に広がり、色々な思想に接することができ、重要地点に学校や病院や施薬所 (dispensary) を開いている宣教師にも接することができた。病気治療を施すためにネパールへの入国を許可される宣教師もいたが、国境は警備兵が巡視していた。

やがて福音の種を蒔く時代になった。これにはキリスト教ミッションが運営する教育機関や医療機関が大きな役割を演じた。

たとえば、インド北東のアッサム (Assam) からネパール極西部のダルチュラ (Darchula) に至るキリスト教の学校にはネパール人の生徒が見られた。アッサム (Assam) のシロン (shillong) 郊外にあるネパール人小学校は、ネパール人キリスト者のラマ (J.B. Lama) が運営していたが、1941 年、マウカル長老教会 (Mawkhar Presbyterian Church) の分教会として纏められ、ネパール人の地域共同社会のニーズに応じて宣教した。

また、多くのハンセン病患者 (leprosy victims) が治療を求めて国境を越え、チャンダグ高原 (Chandag) やカリンポン (Kalimpon) のハンセン病ミッション病院 (Leprosy Mission Hospital) を訪れた。若い患者のケム = シン (Khem Singh) は、キリストを受け入れ、ハンセン病治療の訓練を受け、1947 年、みずから国境の遠隔地へ出かけてハンセン病クリニックを開き、福音を宣教した。当時ネパールでは、ハンセン病患者は生き埋めにされたり、殺されたりもしていた。

その他の医療宣教活動も多くのネパール人の生活に触れた。巡回クリニック (mobile clinic) や、国境に点在する病院や施薬所などである。巡回クリニックは定期的に国境地域を巡回し、医学と福音伝道を結びつけた。インドの病院や施薬所では説教や文書配布が自由であった。また、病院はスタッフにキリスト者を好んで使ったため、若い改宗者たちはみずから看護師や外科手術助手や薬剤調合師などの実用的な技術訓練を受けた。ラクショル病院では数名のネパール人のキリスト者スタッフを訓練したが、彼らは後にネパールにおける最初のヘルス = ワーカー (health worker) となった。

乾季には福音伝道旅行をする福音伝道師 (evangelist) がおり、主にダーズリンから取り寄せたキリスト教文書を携えて、テントで野営しながら、国境を隈なく歩き回った。

インド軍や英国軍のグルカ兵たちも福音のメッセージをネパールへ持ち帰った。

このような福音伝道の努力のお陰で、多くのネパール人がイエスの名をはじめて耳にし、ネ

パール国内では隠れ信者（secret believer）となる者もいたが、キリスト者を告白することはまだ危険であった。

こうして、ほぼ 100 年にわたる国境地帯におけるプロテスタントの宣教活動は、ネパールの開国に向けての優れた準備段階となった。それはキリスト教ミッションに対する疑念や敵意の根拠を破壊し、後にネパール国内で活動するための道筋をつけた。福音の種子は、キリスト教文書や説教や社会的宣教活動を通して、多くのネパール人の心に植え付けられた。

この間、宣教師たちは孤立してはいなかった。ダーズリンやネパール出身の忠実なネパール人キリスト者たちが宣教師の活動に参加し、福音伝道の最前線へと押し進んだ。合法的に入国する方法を捜して時期を待つキリスト者たちもいた。彼らは国境で活発な宣教活動に従事したが、来るべき時代のために成長し経験をつむ重要な時期であった。彼らはやがてネパール国内に教会を建てる先駆者となっていった。

#### 《王政復古》<sup>(7)</sup>

1900 年代前半、世界は 2 つの大戦に揺るがされた。植民地の支配力が弱って民族主義運動が起こると、アジア諸国はドミノ効果のように独立を勝ち取って行った。ネパールもラナ家の排外政策にもかかわらず、周辺で起こっているドラマに巻き込まざるを得なかった。1920 年代と 1930 年代の間、インドの独立運動はインドに定住する多くのネパール人に影響を与えた。彼らはラナ家を打倒する計画を樹て、王宮に幽閉されているトリブヴァン王（King Tribhuvan Vir Vikram Shah）の暗黙の支援を得て、ネパール国民会議（Nepal Praja Parishad）として団結した。しかし 1940 年、この計画が漏れると、ラナ家政府は迅速かつ無情に行動し、何百人もの人々を逮捕、4 人を処刑した。

その運動は鎮圧されないまま、本拠地がインドに移され、インド独立運動の指導の元にネパール＝ कांग्रेस党（Nepali Congress Party）が成長していった。第 2 次世界大戦後、彼らはますます声をあげ、1947 年にはネパールのビラトナガル（Biratnagar）でストライキを行った。それは鎮圧されたが、変革の力は抑えられなかった。インドのマハトマ＝ ガンジ（Mahatma Gandhi）の非暴力抵抗運動（non-violent resistance）にならい、ネパール全土にサッテグラハ（satyagraha：無抵抗運動）が広がった。1923 年、英ネ和親条約が廃止されて英国がインドを退くと、更なる一撃がラナ家に与えられた。ラナ家は自力で立たなければならなくなり、新しいインド政府とネパール＝ कांग्रेसによって、内外から改革を迫られた。

1950 年 11 月、トリブヴァン王は宮殿からカトマンズのインド大使館へ逃れ、更にインドへと亡命した。その 3 日後、ネパール＝ कांग्रेसは国境の 9 つの地点で武装蜂起した。戦闘は血を流したが、インドが調停に入った。1951 年 2 月、トリブヴァン王はカトマンズへ帰還して権力を回復、他の国々と外交関係を結んで開国した。王は民主主義体制を約束したが、すぐに

は成果がでなかった。1959 年、ネパール史上はじめての総選挙が実施されたが、なおも政変は続くことになる。

《1950 年代の教会発展》<sup>(8)</sup>

1950~1951 年の王政復古の後、ネパール人キリスト者がネパールに居住する道がはじめて開かれた。新しいネパールの開発に関心のあるキリスト教ミッションにも道が開かれた。1950 年代の 10 年間は、プロテスタント教会の最初の 10 年間で、ネパール人キリスト者と宣教師が次々とやって来た。宣教師たちは政府（HMG : His Majesty's Kingdom）が課せた改宗禁止の特別法を受け入れ、開発援助の役割に甘んじるようになった。

しかし、この 10 年の内に、カトマンズ（Kathmandu）、ポカラ（Pokhara）、ネパールガンジ（Nepalganji）の 3 か所が教会発展の中心地となり、生まれたばかりの教会が殆ど同時に成長し始めた。カトマンズにおける 2 つのネパール人集会は数年の内に、分かれて 3 つになった。ティル＝バハドゥル＝デワン牧師（Pastor Tir Bahadur Dewan）のバクタブル集会、インド人が指導するジュッダ＝サダック集会（Juddha Sadak Fellowship、後のプターリ＝サダック教会）、ロバート＝カルタク（Robert Karthak）が指導するディリ＝バザール集会（Dilli Bazar Fellowship、後のギャネシュワール教会）である。これらの集会では地元の信者が洗礼を受け、教会がゆっくりと成長し始め、福音伝道も周りの村々へと広がり始めた。

インド人とネパール人のキリスト者たちは、この 10 年の間に、他の 3 か所、ブトワール（Butwal）とタンセン（Tansen）とアンプ＝ピーパル（Amp Pipal）にも居住したが、教会はもっと後になるまで成長しなかった。1957 年にはインドの全国宣教協会（National Missionary Society）のマタイ家の人々（the Mathais）がブトワールに入り、ショバ書店（Shobha Book Stall）を開いた。タンセンとアンプ＝ピーパルは、ネパール合同ミッション（UMN : United Mission to Nepal）のプロジェクト地で、ネパール人キリスト者たちはワーカーとして参加した。ワーカーの幾人かは、ネパール人のために建てられたダージリンのミリク聖書学校（Mirik Bible School）から採用された。他のワーカーはラクショルのダウンカン病院（Duncan Hospital）から来ていた。因みに現在のネパール合同ミッション（UMN）には 30 以上のキリスト教団体が参加している。

その他、1950 年代には、若い教会に対するダージリンからの影響が続き、ネパール語の聖書通信講座が設けられたり、ネパール語のキリスト教文書や、ネパールとダージリンで配布するキリスト教雑誌『友情』（sangati）を発行する出版社などが設立された。

この 10 年間を通してネパール人キリスト者たちは信仰表明と教会設立にそこそこの自由を経験した。しかし、彼らは尚も少数者にすぎず、お互いに孤立し、国の中で珍しい存在とされ、大衆の眼にも重要ではなかった。トリブヴァン王は「信教の自由」と「言論・集会の自由」を

含む、インドに倣った世俗的な憲法を制定していた。息子のマヘンドラ王 (King Mahendra) は 1960 年にこの憲法を一時停止し、1962 年の新憲法でネパールを 1 党・1 宗教の国家と規定した。しかし、これらの出来事とタンセンで 8 人の信者たちが突然逮捕、投獄されたこととの関係は明らかではない。

《1960年代の教会発展》<sup>(9)</sup>

この 10 年の間に、教会はミッションの影響からますます独立していった。特に都市においてはそうであった。福音伝道のダイナミックな拡大もあった。成長過程にあるいくつかの小さな教会は、ネパール＝キリスト教集会 (NCF: Nepal Christian Fellowship) の年 1 回の会議を通して、互いに力を引き出しあった。この集会は、1960 年にカトマンズやポカラやタンセンなどの教会指導者たちが集まってできたもので、この時期における最も意義深い出来事であった。1960 年代の前半までに、ネパール＝キリスト教集会 (NCF) は国内を回る福音伝道チームを形成した。マウド＝マシ (Maud Mashih) はポリオで脚が不自由であったにもかかわらず、1 人の独立した福音伝道者として山々を歩いたが、ポカラ (Pokhara) やペルシン (Pyersingh) やネパール＝ガンジ (Nepalgunji) のような地域では社会的な反発が増していた。

しかし教会は全国的に徐々に強くなり、成長し、数を増していった。ポカラでは 60 年代を通して、毎年 2 週間から 1 か月の聖書学校が開かれ、広範囲の地域の人々が出席した。それはネパール＝キリスト集会 (NCF) の特別聖書研究集会を除く唯一の機会であった。地域のネパール人キリスト者たちは、宣教師たちと協力して、ポカラに近いバグラン (Baglung) とベニ (Beni) とシッカ (Sikha) にもネパール福音伝道バンド (Nepal Evangelistic Band) の新しい前哨基地を設けた。カトマンズでも、1962 年にプタリ＝サダック (Putali Sadak) に、1969 年にギャネシュワール (Gyaneshwar) に、それぞれ教会が建てられた。首都圏では更にもう 2 つの集会が開かれた。1 つは新生リーグ (New Life League) のアブラハム (K.V. Abraham) によってラリトプル (Lalitpur) に、もう 1 つはプレム＝プラダン (Prem Pradhan) によってラズインパット (Lazimpat) に、それぞれ開かれたが、信者は殆ど増えなかった。

1960 年代には、ネパールの東部 (East) と極西部 (Far-West) において教会成長の兆しが見えた。1961 年には、ネパール合同ミッション (UMN: United Mission to Nepal) が東部のオカルドゥンガ (Okhaldunga) を開拓、2 組みのネパール人夫婦が共に働き、うち 1 組の夫婦は福音伝道師で、集会が開かれた。1966 年頃には、東部のダラン (Dharan) のグルカ＝キャンプ (Gurkha Camp) で小さなネパール人集会が始まった。その間、極西部のダンデルドゥラ (Dandeldhura) では、キャサリン＝ヤング (Katherine Young) が施薬所を開き、ハンセン病の世話をしていた。

この 10 年の間には、キリスト教諸団体も新しく入り始めた。1966 年には夏期語学研究所 (Summer Institute of Linguistics) が、1967 年にはキリスト青年会 (Youth for Christ) が、1968 年

には作戦動員団（Operational Mobilization）が、1969 年には聖書協会委員会（Bible Society Committee）が、それぞれ設立されたが、いずれも 1970 年代～1980 年代まで成長しなかった。また、極東放送局（Far East Broadcasting company）がネパール語のラジオ放送を始め、ゴスペル＝レコーディングズ（Gospel Recordings）は 8 つの言語で録音事業を興した。

ダーズリンでは、ネパール語のキリスト教文書を作成していた者たちが、ネパール語キリスト教文書協会（Nepali Christian Literature Society）を設立した。新本が出回ったが、殆どが翻訳本であった。ダーズリンで印刷された本の 40% はネパールへ入ってきたが、聖書組合（Scripture Union）の注釈（notes）もネパールに入ってきた。とくに改訂版ネパール語新約聖書（Revised Nepali New Testament）と詩篇（Psalms）、及び新しい賛美歌集（hymnbook）は大きな感動を与えた。

教会は今や更なる成長に必要な装備を手に入れた。ミッションは政府とともに認可された開発プロジェクトに携わり、ネパール人教会は重要地点で成長し、他の地点における福音宣教の足掛かりを確保し、独り立ちの途についた。経験に富んだ牧師たちや指導者たちが持ち場につき、福音伝道師たちが田舎を巡回し、次の 20 年間に爆発的な成長を遂げる舞台が用意されたのである。キリスト者に対する迫害は時として 1990 年の民主憲法の制定まで続いたが、この民主憲法にしても「信教の自由」を謳いつつもヒンズー教国を標榜しているところに、まだ一抹の不安が残されている。

資料

(資料1)「ネパールのキリスト教伝道史(1600s~1960s)」年表

山本忠義

- 1 . Lichhavi Dynasty (4C.半 ~ 8C.半)
- 2 . 不明 (8C.半 ~ 13C.半)
- 3 . Malla Dynasty (13C.半 ~ 18C.半)

14C.後半、King Jayasthiti Malla  
(Caste 導入)

(Malla/Newari Culture & Language 全盛)

15C.末、Malla 王朝分割  
(Kathmandu, Bhaktapur, Lalitpur)

1579 Jesuit Order

Decree of Liberty of Conscience 発布  
(3 国王、キリスト教保護)

Capuchin Order  
1715 Nepal Mission

- 4 . Shah Dynasty (18C.半 ~ 現在)

1769 King Prithvi Narayan Shah 盆地征服  
1769 排外政策開始  
(宣教師、キリスト教徒追放 Bettiah へ脱出)  
Anglo-Nepal War (1814-1815)  
(英国東インド会社との国教紛争)  
英ネ和親条約 (Treaty of Sugauli, 1816)  
(宣教師、ヨーロッパ人の入国禁止  
排外政策補強)

1769 Exodus

亡命教会  
Darjeeling  
William Macfarlane

General Jung Bahadur Rana  
ラナ家専制政治 (Rana oligarchy, 1846-1951)  
(政治活動、公教育禁止)  
英ネ和親条約 (Treaty of Sugauli) 改定  
(インド総督府、ネパールの外交を独占)  
ネパール国内法典 (National Code of Nepal, 1854)  
(カースト制度補強)

ネパール語聖書  
Ganga Prasad  
Pradhan  
英国聖書教会  
(BFBS)

西部・南部福音宣教  
Raxaul

King Tribhuvan  
王政復古、開国 (1951)

海外在住キリスト教徒  
帰国始まる

King Mahendra  
新憲法 (1962)  
親政政治 (Panchayat)

プロテスタント教会  
UMN  
Putali Sadak  
Gyaneshwar

King Viendra  
親政政治 (Panchayat)  
民主化運動による民主憲法 (1990)





**(資料4)** MEMBER BODIES OF THE UNITED MISSION TO NEPAL (April 1979)

American Lutheran Church  
Assemblies of God (USA)  
Baptist Missionary Society (UK)  
Bible and Medical Missionary Fellowship (International)  
Christian Church (Disciples) (USA)  
Church Missionary Society of Australia  
Church Missionary Society of UK  
Church of North India  
Committee for Service Overseas of the Protestant Churches of Germany  
Darjeeling Diocesan Council of CNI and Church of Scotland  
Finnish Missionary Society  
Free Church of Finland  
Gossner Mission (Germany)  
Japan Overseas Cooperative Service  
Leprosy Mission (Associate Member) (UK)  
Lutheran Church of America  
Mennonite Board of Missions (USA)  
Mennonite Central Committee (USA)  
Methodist Church (UK)  
Orebro Mission (Sweden)  
Presbyterian Church in Canada  
Presbyterian Church in Leland  
Regions Beyond Missionary Union (International)  
Swedish Free Mission  
Swiss Friends for India and Nepal  
United Church of Canada  
United Methodist Church (USA)  
United Presbyterian Church (USA)  
Wesleyan Church of America  
World Concern (USA)  
World Mission Prayer League, Norway  
World Mission Prayer League, USA

## 注

注の文献略号は下記のとおり。

- ネ : 西澤憲一郎『ネパールの社会構造と政治経済』(勁草書房、1987)
- N : John Gottberg Anderson, *Nepal* (1987, Apa Productions)
- V N : Aun San Suu Kyi, *Let 's Visit Nepal* (1985, Burke Publishing Company)
- S H : Netra B. Thapa, *A Short History of Nepal* (1990, Ratna Pustak Bhandar)
- P N : Rishikesh Shaha, *Politics in Nepal* (1992, Manohar Publishers)
- N G : Jonathan Lindell, *Nepal and the Gospel of God* (1997, UMN)
- N E : Madhu Raman Acharya, *Nepal Encyclopedia* (1994, Nepal Encyclopedia Foundation)
- H C : Cindy Perry, *A Biographical History of the Church in Nepal* (2000, Nepal Church History Project Kathmandu, Nepal)

- (1) ネ, pp. 95-139 (関連箇所、以下同じ)

N, pp. 31-43

VN, pp. 17-35

SH, pp. 42-46, 102-104, 120-122, 152f.

PN, pp. 173f., 240-243

NE, pp. A few pages about caste, constitution, etc.

NG, pp. 211-263

- (2) HC, pp. 1-10 (翻訳及び要約、以下同じ)

- (3) Ibid., pp. 11-14

- (4) Ibid., pp. 23-28

- (5) Ibid., pp. 39-42

- (6) Ibid., pp. 53-57

- (7) Ibid., pp. 58

- (8) Ibid., pp. 83f.

- (9) Ibid., pp. 84f.

(やまもと・ただよし 海外教育協力隊代表)